島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第2巻，107－115，2008

臨床看護研究の現状と ポートフォリオを活用した臨床看護研究の支援

吾郷美奈恵・加藤　真紀・山下　一也・栗原由美子*
小田原みち江*・水津　昌子**・竹内　節子***

概　要

同一県内の総合病院と地域医療支援病院で看護研究を行った80名を対象に，臨床看護研究にポートフォリオ活用を試みた結果，58.8％が役立つと評価していた。活用した者はそうでない者に比し，「看護研究を行ったことで自己の成長が図れた」「研究を行ったことで自己教育力が高まった」「看護研究は社会に貢献するという方向性のある行為である」の項目で有意差（$p<0.05$）を認めた。

臨床で行う看護研究については9割程度が正しく認識していたが，研究計画書から公表までのプロセスで9割程度が難しいと答えていた。また，研究には上司や同僚の支援が重要と全員が答えており，自己学習の重要性も認識していた。

キーワード：ポートフォリオ，看護研究，継続教育

Ⅰ　緒　　言

看護教育におけるポートフォリオ活用は，2000年に英国における卒後教育への取り組みが紹介され，2003年頃より徐々に報告が増えている（加藤，2005）。我々は，看護基礎教育において，学生の学びのプロセス・質・深さが見える教育実践の方法としてポートフォリオに注目し，先駆的に「講義」「演習」「実習」「資格取得」に活用してきた（吾郷，2005）。また，「学生評価」の新たな展開としても有効な方法である（唐澤，2003）（安川，2007）。病院においては，キャリア開発ラダー（高瀬，2005）や目標管理（狩野，2007）に活用され，その成果が報告されている。

ポートフォリオとは，紙ばさみや書類かばん，あるいは作品ファイルを意味する。ここでいうポートフォリオとは，自分がしてきた仕事や研究，活動，成果をファイルし一元管理したもので，これにより成長プロセスや能力，個性，センス，考え方などを見出すことができるものである（鈴木，2005）。

「看護研究」は「新人教育」や「現任者教育」などを柱とする院内教育として位置づけられ，専門職業人としての発達を支援している（井部，2007）。一方，看護研究を行う際に課題となっているのは，臨床における問題や疑問から研究目的へ絞り込み，研究計画書の作成である（石橋，2008）。また，研究の成果が施設内の発表にとどまり，公表されないことも多く，近年は外部講師の指導の基に，看護研究の支援を行っている施設も多い。臨床看護研究にポートフォリオを活用することで，臨床看護職員一人ひとりの成長プロセスが見いだせ，専門職業人としての発達が支援できると思われる。しかし，臨床においては看護研究の現任者教育における位置づけは様々であり，研究メンバーに介護職が含まれる病院もある。

本稿では，看護職員における看護研究の意義や研究プロセスにおける課題など2施設の現状を明らかにし，ポートフォリオを活用した看護研究支援について評価することを目的とし，今

* 島根県立中央病院
** 社団法人益田市医師会立益田地域医療センター医師会病院
*** 島根県立石見高等看護学院
本研究は，本学平成18年度特別研究費の助成を受けて行った。

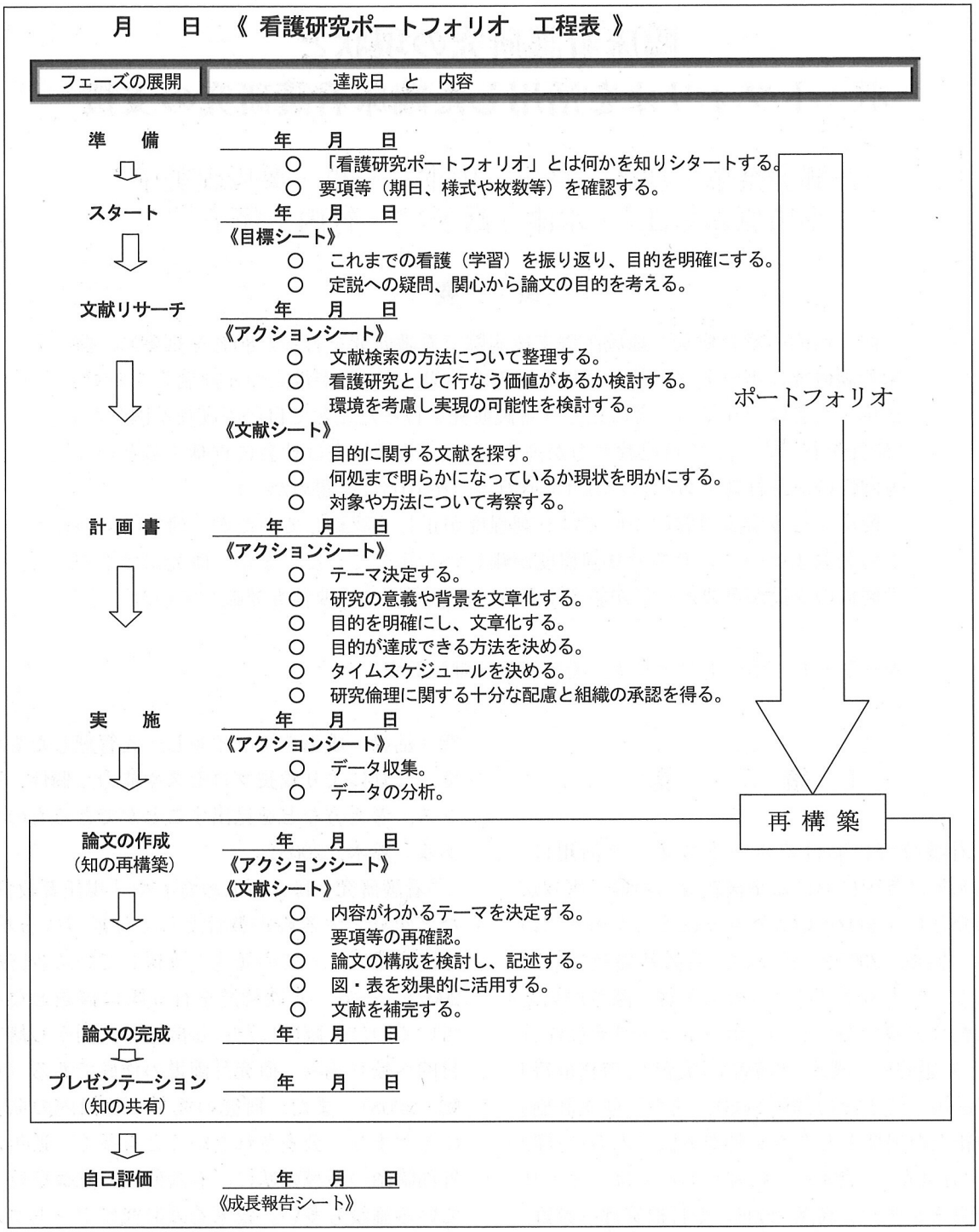

図１　看護研究ポートフォリオの工程表

後の臨床看護研究支援について考察する。

Ⅱ．方　　法

１．対象

対象は，同一県内の総合病院と地域医療支援病院のいずれかに勤務し，平成18年度に看護研究を行うことを計画している看護職員である。総合病院では３～４年目研修の一貫として取組む者が多く，研究メンバーは看護者のみである。また，地域医療支援病院では各病棟で一つの研究に取組んでおり，看護者と介護者が研究メンバーとなり共同して行っている。

分析対象は，院内の研究発表後に行ったアンケートに協力が得られた看護職員で，総合病院42名（回収率84.0％），地域医療支援病院38名（回

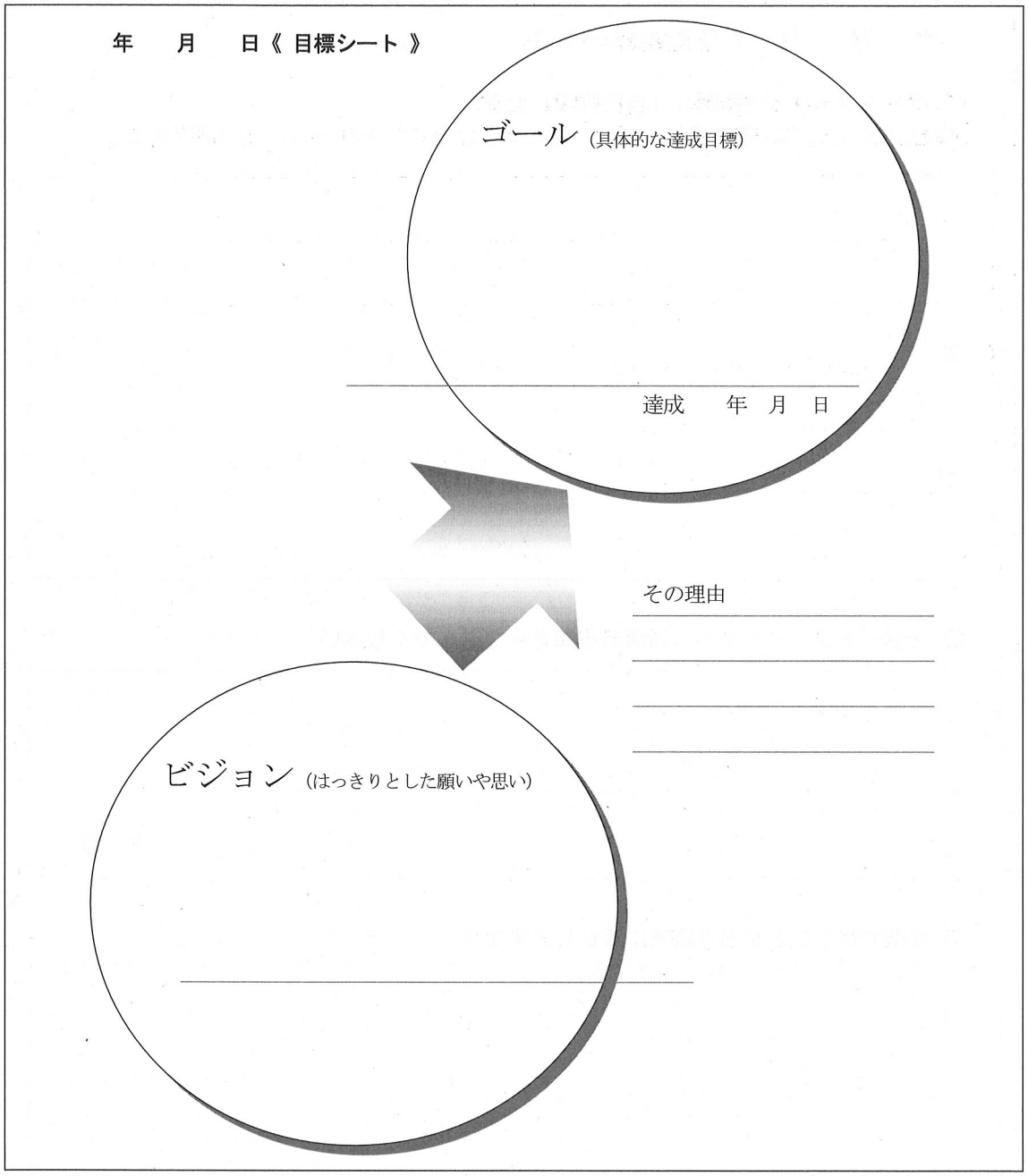

図2　目標シート

収率97.4%）である。

2．方法

対象は，各自の看護研究計画書に基づいて看護研究を進め，そのプロセスにおける資料等をファイルに管理し，ポートフォリオとして蓄積・活用する。対象には，臨床における看護研究の目的や方法についての説明を研究がスタートする年度はじめに行い，理解と同意が得られた者に市販のクリアファイルとシート集（吾郷，2006）を配布した。配布時に看護研究ポートフォリオの工程表（図1）に基づき，ポートフォリオの活用方法について30分程度の説明を行った。シート集には，“目標シート”（図2），自由に記載できる“アクションシート”，文献の出典と概要を記載する“文献シート”，“成長報告シート”（図3）がある。また，対象の勤務している部署の看護師長にも概要を説明し，理解と協力研究を求めた。

ポートフォリオの活用方法として，次のことを伝えた。①時系列で順にファイルする。②研

年　月　日　《 成長報告シート 》

○ ポートフォリオを俯瞰し「自己評価」する。
成長したこと、考え方の変化、身につけた力などをエントリーし、３つ選択する。

1 .....

.....

2 .....

.....

3 .....

.....

○ 元ポートフォリオから、価値ある知を一つ選んでください

.....

.....

..... 月　日

○ 授業で得たことをどう現実に活かしますか？

.....

.....

.....

.....

.....

図３　成長報告シート

究がスタートする時までに，“目標シート”でビジョンとゴールを明確にする。③検索した文献は“文献シート”に概要を記入する。④研究メンバー等との話し合いや相談や指導を受けた場合等は“アクションシート”に記入する。⑤施設内発表後に“成長報告シート”を記入する。また，各個人のポートフォリオは各自が管理し，研究者が活用方法や内容を直接確認することはせず，質問があれば答えることを約束した。

施設内の研究発表終了後に，研究の意義，研究プロセスにおける重要性や難しさ，研究にともなう付加価値，ポートフォリオに関する内容についてアンケート（Ａ４サイズ２枚）を配布・回収した。配布は各施設の共同研究者が行い，

表1　ポートフォリオ活用の状況

単位:名(%)

	活用した	途中まで活用した	活用しなかった	計
研究代表者	23(82.1%)	5(17.9%)	0	28(100%)
共同研究者	2(3.8%)	14(26.9%)	36(69.2%)	52(100%)
計	25(31.3%)	19(23.7%)	36(45.0%)	80(100%)

表2　研究に取組んだ動機

	総合病院	地域医療支援病院	計
自分の意思	7(16.7%)	2(5.2%)	9(11.3%)
同僚に誘われて	6(14.3%)	2(5.2%)	8(10.0%)
上司の勧め等	26(61.9%)	18(47.4%)	44(55.0%)
その他	3(7.1%)	16(42.2%)	19(23.7%)
計	42(100%)	38(100%)	80(100%)

所定の箱に自主提出を依頼し回収した。

また，２施設とも研究代表者が講師として研究の概要について90分程度の講義を行い，研究課題毎に研究計画書とまとめのタイミングで個別指導を２回行った。また，研究期間中は，各施設の研究担当者が中心となって継続的に支援している。

分析は，統計ソフトSPSSver.14.0Windows版の記述統計やクロス集計表などを用いた。また，Pearsonのカイ２乗検定を行った。

３．倫理的配慮

研究の目的・方法とともに，①自由意思，②アンケートは無記名，③個人が特定されることはない，④協力の有無により不利益はない，⑤勤務評価とは無関係，⑥提出を持って承諾と判断する，⑦公表などについて，文書と口頭で説明し，協力を得た。また，この研究は，学内の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

Ⅲ．結　　果

今回の対象においては，研究代表者が35.0%を占めていた。ポートフォリオの活用状況は，研究代表者で「活用しなかった」者はいなかったが，共同研究者では途中まで活用した者を含めて30.7%であった（表１）。対象が研究に取組んだ動機をみると，「自分の意思」は総合病院の16.7%に比べ地域支援病院は5.2%と少なく，最も多かったのは「上司の勧め」で総合病院61.9%，地域医療支援病院47.4%であった（表２）。

看護研究の意義，研究プロセスにおける重要性や難しさ，研究にともなう付加価値は，総合病院と地域医療支援病院で有意な差は認めなかった（表３）。しかし，“看護研究は社会に貢献する方向性をもった行為である”と「思わない」者が総合病院26.2%，地域医療支援病院15.8%であった。また，地域医療支援病院では“看護研究は課題を解決するための意図的な行為である”と「思わない」者が18.4%いた。看護研究計画書や文献検討，計画に基づき実践，成果を論文としてまとめたり発表することは，いずれも９割程度が重要であると答えていた。また，“看護研究計画書を作成することは難しい”は，全員が「そう思う」又は「ややそう思う」と答えていた。

看護研究を行う上での支援や研究の成果に，総合病院と地域医療支援病院で有意な差は認めなかった(表４)。“研究をするには上司の理解・指導・配慮が重要である”，“研究をするには同僚の理解・協力が重要である”と，全員が「そう思う」「ややそう思う」と答えていた。また，“自己学習が重要である”と１名を除き98.8%が「そう思う」「ややそう思う」と答えていた。また，

表3　看護研究のプロセスにおける課題と意義

		そう思う		ややそう思う		ややそう思わない		そう思わない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
実践活動の質を高めることができた	総合病院	14	33.3%	26	61.9%	2	4.8%	—	
	地域医療支援病院	11	28.9%	24	63.2%	3	7.9%	—	
自己の成長が図れた	総合病院	13	30.9%	28	66.7%	—		1	2.4%
	地域医療支援病院	9	23.7%	26	68.4%	3	7.9%	—	
課題を解決するための意図的な行為である	総合病院	15	35.7%	25	59.5%	2	4.8%	—	
	地域医療支援病院	15	39.5%	16	42.1%	7	18.4%	—	
系統的なプロセスを経て計画的に行う行為である	総合病院	17	40.5%	24	57.1%	1	2.4%	—	
	地域医療支援病院	16	42.1%	20	52.6%	2	5.3%	—	
社会に貢献するという方向性をもった行為である	総合病院	11	26.2%	20	47.6%	9	21.4%	2	4.8%
	地域医療支援病院	7	18.4%	25	65.8%	6	15.8%	—	
看護研究計画書は重要である	総合病院	21	50.0%	18	42.9%	3	7.1%	—	
	地域医療支援病院	24	63.2%	10	26.3%	4	10.5%	—	
文献検討は重要である	総合病院	30	71.4%	12	28.6%	—		—	
	地域医療支援病院	28	73.7%	9	23.7%	1	2.6%	—	
計画書に基づき実践することは重要である	総合病院	16	38.1%	24	57.1%	2	4.8%	—	
	地域医療支援病院	21	55.3%	15	39.5%	2	5.3%	—	
成果を論文としてまとめることは重要である	総合病院	19	45.2%	20	47.6%	3	7.1%	—	
	地域医療支援病院	20	52.6%	17	44.7%	1	2.6%	—	
成果を発表することは重要である	総合病院	20	47.6%	21	50.0%	1	2.4%	—	
	地域医療支援病院	18	47.4%	18	47.4%	2	5.3%	—	
看護研究計画書を作成することは難しい	総合病院	35	83.3%	7	16.7%	—		—	
	地域医療支援病院	27	71.1%	11	28.9%	—		—	
文献検討は難しい	総合病院	23	54.8%	13	30.9%	4	9.5%	2	4.8%
	地域医療支援病院	21	55.3%	15	39.5%	2	5.3%	—	
計画に基づき実践することは難しい	総合病院	21	50.0%	17	40.5%	3	7.1%	1	2.4%
	地域医療支援病院	14	36.8%	15	39.5%	8	21.1%	1	2.6%
成果を論文としてまとめることは難しい	総合病院	31	73.8%	9	21.4%	—		2	4.8%
	地域医療支援病院	25	65.8%	11	28.9%	2	5.3%	—	
成果を発表することは難しい	総合病院	15	35.7%	19	45.2%	5	11.9%	3	7.1%
	地域医療支援病院	13	34.2%	16	42.1%	8	21.1%	1	2.6%

表4　臨床看護研究の支援と成果

		そう思う		ややそう思う		ややそう思わない		そう思わない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
上司の理解・指導・配慮が重要である	総合病院	36	85.7%	6	14.3%	—		—	
	地域医療支援病院	27	71.1%	11	28.9%	—		—	
同僚の理解・協力が重要である	総合病院	37	88.1%	5	11.9%	—		—	
	地域医療支援病院	32	84.2%	6	15.8%	—		—	
外部講師の指導が重要である	総合病院	18	42.9%	22	52.4%	2	4.7%	—	
	地域医療支援病院	25	65.8%	12	31.6%	1	2.6%	—	
自己学習が重要である	総合病院	32	76.2%	9	21.4%	1	2.4%	—	
	地域医療支援病院	24	63.2%	14	36.8%	—		—	
モチベーションが高まった	総合病院	15	35.7%	21	50.0%	5	11.9%	1	2.4%
	地域医療支援病院	15	39.5%	20	52.6%	2	5.3%	1	2.6%
自己教育力が高まった	総合病院	13	30.9%	23	54.8%	6	14.3%	—	
	地域医療支援病院	12	31.6%	22	57.9%	3	7.9%	1	2.6%
職場が活性化した	総合病院	6	14.3%	21	50.0%	12	28.6%	3	7.1%
	地域医療支援病院	2	5.3%	17	44.7%	18	47.4%	1	2.6%

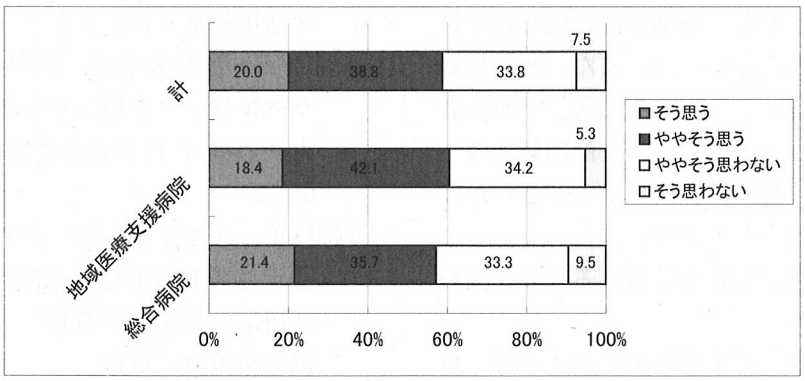

図４　「ポートフォリオは看護研究支援に役立つ」の回答

“外部の指導が重要である”96.3%，“研究をしたことでモチベーションが高まった”88.8%，“自己教育力が高まった”87.5%が「そう思う」「ややそう思う」と答えていた。しかし，“職場が活性化した”は「そう思う」「ややそう思う」と答えた者は57.5%であった。

“ポートフォリオは看護研究支援に役立つ”の問に対して「そう思う」20.0%，「ややそう思う」38.8%で，思うと答えた者は58.8%で施設による差は認めなかった(図４)。しかし，ポートフォリオ活用した者が活用しなかった者に比べて有意（P<0.05）に“ポートフォリオは看護研究に役立つ”と答えていた。ポートフォリオを活用した者は活用しなかった者に比べて有意差（P<0.05）を認めた項目は，“自己の成長が図れた”，“自己教育力が高まった”，“看護研究は社会に貢献するという方向性をもった行為である”であった。また，看護研究計画書や文献検討などの重要性は，研究代表者が共同研究者に比して，より強く感じているようであったが有意差は認めなかった。

アンケートで“目標シート”の内容を問うたところ，ビジョンには「視野の広い人間になる」「看護研究から得た学びを看護実践に活かす」など研究の意義が感じられる内容が多く，ゴールには「成果の発表」と書いた者が多かった。また，“成長報告シート”の「成長した，考え方の変化，身に付けた力」は「患者や家族の思いが理解できて見方が変わった」「スタッフにアドバイスができる力が身に付いた」「看護研究はおもしろい」などで，今回の研究目的そのものではなく，もっと大きな意義を見出していた。

Ⅳ．考　　察

今回，２施設において看護研究を行う看護職員を対象に，ポートフォリオを紹介し活用を依頼した結果，ポートフォリオは看護研究に役立つと答えた者は58.8%であった。その背景として，看護研究は複数のメンバーで取組むことが一般的であり，メンバーそれぞれが同じ情報を管理することはない。また，ポートフォリオを活用した者は，研究代表者が多かったことからも，共同研究者に必要性が乏しいものであったことが推察される。しかし，臨床において看護研究を推進するねらいは，研究で成果を出すことだけではなく，看護の質を高めることにある（井部，2007)。また，臨床での研究成果の活用も課題となっている（清村，2004)。ポートフォリオとして，“目標シート”にビジョンとゴールを示すことで，看護研究を行うことが目的ではなく，研究のプロセスからの学びを意図的に引き出すことができる（吾郷，2005)。また，研究終了後に“成長報告シート”を書くことで，研究を行った事から得られる付加価値を明らかにすることができる。このことは，ポートフォリオを活用した者は，自己の成長が図れた，自己教育力が高まった，社会に貢献すると有意（p<0.05）に答えていたことからも推察できる。

研究をする上で，上司や同僚の支援や外部講師，自己学習の重要性は認識できているが，研究計画書は難しいと答えており，今後も丁寧な指導が必要なことは明らかである。一方，研究をしたことでモチベーションや自己教育力が高まったと８割以上が答えており研究に取組んだ

成果は大きい。しかし，職場が活性化したと答えた者は6割に満たなかった。また，研究に取組んだ動機をみると，「自分の意思」である者は少なく，多くが「上司の勧めや院内研修の一貫」と答えいた。確かに上司の勧めがきっかけであっても，研究をしたのは自分自身であることから，自分の意思で行うと言えるような関わりが必要と考える。

今回，ポートフォリオを活用したことで，単に研究成果の追求にとどまらず，広い視野で学べたことを意識化できると考えられる。今後は，ポートフォリオ活用の対象は研究代表者とし，共同研究者と共有しながら進めることが適切と考えられた。

V．結　　論

看護職員における看護研究の意義や研究プロセスにおける課題など総合病院と地域医療支援病院で有意な差は認められなかった。看護研究支援にポートフォリオを活用した者は，“看護研究を行ったことで自己の成長が図れた”“研究を行ったことで自己教育力が高まった”“看護研究は社会に貢献するという方向性をもった行為である”と有意（$p<0.05$）に答えていた。

文　　献

吾郷美奈恵，山下一也，吾郷ゆかり，灘久代，加藤真紀（2005）：看護基礎教育でのポートフォリオ活用，看護展望，30（11），33-44.

吾郷美奈恵，山下一也，加藤真紀，吾郷ゆかり，灘久代（2006）：看護におけるポートフォリオ活用のためのシート集，ポートフォリオ活用推進プロジェクト（出雲）.

石橋照子，吾郷美奈恵，梶谷みゆき（2008）：ラベルワークを用いた看護研究計画書作成方法の検討，日本看護学教育学会誌，18(1)，65-73.

井部俊子，中西睦子監修（2007）看護管理者学習テキスト第4巻・看護における人的資源活用論（第1版第5刷），59-71，日本看護協会出版会，東京.

加藤真紀，吾郷ゆかり，吾郷美奈恵，灘久代，山下一也（2005）：看護教育におけるポートフォリオ活用の文献展望，島根県立看護短期大学紀要，11，99-107.

狩野京子，曽田美佐子，三成富美江，藤原ヒロコ（2007）：ポートフォリオ活用による目標管理の成果～中堅看護師のモチベーションアップにどうつながったか～，看護管理，17（1），29-35.

唐澤由美子，正木治恵，井上智子，亀井智子，北山三津子，高田早苗，牧本清子，村本淳子，吉田千文（2003）：達成事項を記録したポートフォリオ評価，Quality Nursing，9（6），52-59.

清村紀子，西坂和子（2004）：臨床での研究成果活用に関する要因分析，日本看護研究学会誌，27（1），59-72.

鈴木敏恵（2005）：ポートフォリオQ＆A，看護展望，30（11），20-21.

高瀬チエ，石井幹子(2005)：キャリア開発ラダーでのポートフォリオ活用の試み，看護展望，30（11），45-47.

安川仁子（2007）：看護教育におけるポートフォリオの活用～学習のプロセスを重視した評価～，48（1），18-23.

Advances of Clinical Nursing Research Utilizing the Portfolio

Minae AGO, Maki KATO, Kazuya YAMASHITA
Yumiko KURIHARA*, Michie ODAHARA*
Masako SUIZU** and Setsuko TAKEUCHI***

Key Words and Phrases : portfolio, nursing study, nursing education

* Shimane Prefectural Central Hospital
** Masuda Medical Association Hospital
*** Shimane Prefectural Iwami School of Nursing